

アンベルト・ドローイング

起こらなかった

世界についての物語

三浦文典

建築家たちが描いた、ここではないどこか。

ドローイングをめぐる想像の旅へ、ようこそ。

はじめに 想像の翼

6

無意識の惑星 ポール・ルドルフ

14

旅人の距離感 エミリオ・アンパース

18

幕切れの余韻 スーパースタジオ

22

はかなく伝えるということ ルドルフ・シュタイナー

26

愛を求めてまっすぐに シャール・フリーエ

30

神の目線 ビーテル・ブリユージェル

36

虚構の恍惚 ハンス・ベルツイヒ

40

時をかける想像 アルド・ロッシ

44

ここではないどこか マツシモ・スコラーリ

48

豊かさのデイトイル トニー・ガルニエ

52

世界の成り立ちを描く仕事 ヘルマン・フィンステルリン

58

平和のアイコン エーリッヒ・メンデルゾーン

62

鏡のむこう ジョン・ソーン

66

ぼかしのリアリズム ヒュー・フェリス

70

押し通すことも フンデルトヴァアツァー

76

亡霊の街 ロブ・タリエ／レオン・タリエ

80

等身大の都市計画 ヨナ・フリードマン

86

甘えていい場所 スタンリー・タイガーマン

90

本気の冗談 ビーター・クック

94

動かない世界 アルネ・ヤコブセン

98

明るい未来計画 ラルフ・ラフソン

104

世界の終わりがた エットーレ・ソットサス

108

危ういバランス オットー・ワグナー

112

異郷の王女 リナ・ボ・バルデイ

116

築くこと、傷つくこと、気づくこと レベウス・ウツズ

120

真つ当な不思議さ アタナシウス・キルヒャー

126

コラム ユートピア

35

ル・コルビュジエ

57

近代性

85

愛情

103

作家紹介

130

あとがき

138

ぼくのまわりでよく「本当は建築家になりたかったんだけど、数学も物理も苦手だったからあきらめた」という話を聞きます。たしかに理系の大学に入ろうと思えばそういう試験科目を避けることは難しいかもしれませんが。でも実際はそれ以外のルートもたくさんありますし、何よりいま、設計の仕事をしているばかりは、複雑な計算や数式なんてこれっぽっちも使いません。電卓だつて遅いし、エクセルの使いかたも実はよく分かっています（そういうことをいうとだいたいにおいて、相手は非常にがっかりした様子になるのであまりいわないようにしています）。じゃあ一体、建築の仕事をするときに大切なこととはなんなのでしょう。

ぼくの大学での師であり、そのあと勤めた設計事務所の代表でもある建築家の古谷誠章さんはいつも温厚で、めったなことでは怒りませんが、一度こつぴどく叱しかられたことがあります。

当時、大きな市民会館の設計を担当していたぼくは、ワーケーションを通じて仲よくなった地元の中高生たちからある日、「こんどみんなでお泊まり合宿をするから、お兄さんも来てよ」と誘われました。ぼくも「それは楽しそうだね。ぜひぜひ」と迷わず答えました。

それから一カ月ほどたつて合宿の日取りが決まったころ、ぼくは設計の仕事に追われ、膨大な図面の山に埋もれていました。プロジェクトチームのなかでいちばん下っ端の自分が、さすがにこの状態で合宿には行けないなあと思ひ、やんわりと断ったのですが、それを知った古谷さんにすぐさま呼び出されました。古谷さんがいったことはこういうことでした。

相手がこどもだからといって、約束をかんたんに破るような人間になつてはいけません。相手の気持ちになつて、相手が自分に何をしてほしいのか想像するのが建築家にとつていちばん大切なことだ。その上で、相手が想像もしなかった豊かさや楽しさを創造して投げ返すのが建築家の仕事だ。

ぼくは自分が恥ずかしくなり、すぐ電話をして合宿をすぐく楽しみにしていることを伝えました。

創造することと想像すること。話し言葉で聞くとどつちのことかよく分からなくて、とり違えてしまうことがよくあります。というか不思議なことに、置き換えても意外と意味が通じてしまう言葉のように思えます。何かを創造するということは、その前にたたくさんの想像があつてこそ、はじめてできることのような気がするからです。

どうして最初にそんな話をしたかというところ、この本をつくらうと思つたきっかけが、想像すること——創造することに先立つて現れる、そして誰にでもできる原始的なおこない——の大切さをなんとか伝えられないかと思つたからです。

建築史に関する資料や本はたくさん出ていますが、よつぽどの学者や専門家でない限り、それをまるまる知識としてためこんでも、使いみちはほとんどありません。でもたとえばローマを旅行する前に、その場所の建築、歴史、むかしの人びとの暮らしなどをすこしだけ勉強したら、現地に行つてその空気を吸い、その食べ物を食べたとたんに、ばらばらだった知識がひとつになつていきいきとよみがえり、古代ローマ人たちの日

常に想像が膨らみ、知らないで行くよりはるか遠くに旅立てるような気がします。ぼくは建築史の専門家ではないし、緻密で正確な分析はほかの人にお願ひせざるをえません。でも、過去の限られた情報の隙間を埋め、街や生活を想像し、気ままな空想の旅に出るといふ楽しみは、専門家たちだけに任せてしまうのは本当にもつたいたいと思つたのです。たとえ稚拙な誤解の集積だつたとしても、それが間違つていたとしても、自分でつくれた世界というのは、どんな借り物の世界よりも強く、豊かなのだから。

今回紹介するドローイングは、ぼくが学生るとき図書館の奥の奥のほうから引つ張り出してはばらばらと見て、興奮していたものを中心に集めました。ほかの人たちが手にとらないような本のほうが秘密めいてわくわくするので、だいたい古めいた外国の本となつて、意味なんかほとんど分からず、誰が描いたかもよく知りませんでした。それでもまるで絵本を眺めることもみたいに、勝手にその世界の主人公になつて、あるいはその絵のタッチや色使いをまねてみたりしました。どんな人がこ

れを描いたんだろう、その人はどこでどんな人生を送ったんだろう、そして描かれたこの世界にはどんな人が住んでいるんだろう？ と想像しながら。

そういうことをしているうちに、自分が惹かれるドローイングにある共通点があることに気づきました。ひとつは、カタログ商品のよう描かれた建築単体のドローイングよりも、そのまわりの風景や街全体を描いたもののほうが、世界に広がりがあつて、より想像を膨らませられて楽しいということ。もうひとつは後に実現した計画のドローイングより、なんらかの理由によつて実現しなかつたアンビルト・ドローイングのほうが、自分の妄想の勢いが加速するということでした。

「アンビルト」という言葉は建築以外の人びとにはなじみがうすいと思います。un-built、つまり「建てられることのなかつた」という意味ですが、その理由はてんでばらばらです。なんらかの外的要因（政治情勢や資金不足、コンペで負けたなど）もあれば、内的要因、つまり最初から実現を前提としていなかったドローイングも数多くあります。いずれにせよ、ここに描かれた世界たちは、時も場所も超えて存在しているのではなく

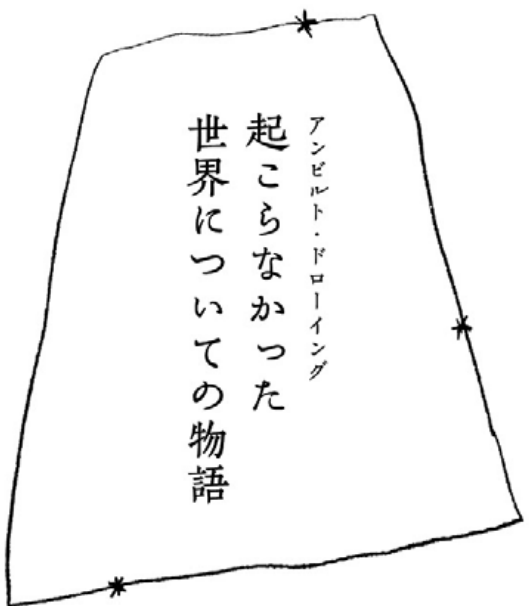
て、それが描かれた時代背景や作家の状況などに密接に関係していて、その時代、その人にしか描けなかつた絵空の社会認識です。つまりぼくたちは現実の時間を積み重ねて歴史をつくっていると同時に、その何倍ものパラレルワールドを日々喪失しながら、いまこの瞬間を生きています。

ヒトラーがいなくなつたら、リンカーンがいなくなつたら、織田信長が天下をとつていたら、いま生きているこの世界は大きく違つたものになつていたかもしれません。あたりまえのように存在するこの世界も、実はたまたま実現したもろく危うい世界で、ほんのすこしのきつかけで、まったく別の世界になつていたかもしれないし、現実離れして見えるドローイングたちも、あつさり実現したかもしれません。そう考えると、これからの未来の世界を決めていくのは、意外にもぼくやあなたであるかもしれないし、だとするといまぼくたちにしか描けない壮大な夢物語を、むかしの人たちに負けないくらいめいっばい描かなくては、想像しなくてはいけないのでは、と思うのです。

一九九〇年代くらいを境に、圧倒的な世界の広がりを感じさせるドローイングがめっきり少なくなっていました。コンピュータグラフィックスが発達したせいで、手を使って描くことが少なくなってきたからかもしれないし、縮小していく社会のなかで、実現に結びつかないような作業は忙しくてやっていたらなくなつたのかもしれない。ただ理由はどうあれ、無限の可能性の存在に気づきもせず、誰かの勝手な都合でつくられた世界を安閑^{かんかん}として生きるよりは、架空の世界を自由に飛びまわるたくましい翼をもっていたいと思うのです。

日本では特に、建物の図面を書く技術者のように思われていることが多い建築家ですが、そもそもそれは、まだ見ぬ新しい世界の成り立ちを提示することのできる数少ない職業のひとつです。建築士と違って建築家は資格なんてないから、そういったことに想像を膨らませれば、むしろ誰でも建築家といえるのではないのでしょうか。

世界中の人たちが自分を空想の建築家だと思つて、思い思いの想像の世界へ軽やかに飛び立てば、現実のこの世界もほんのすこしよくなるような気がします。



旅人の距離感

エミリオ・アンバース

Emilio Ambasz 1943-

大学に入ったばかりの夏に、たしか東京ステーションギャラリーでエミリオ・アンバースの個展があった。専門知識のかけらすらもち合わせていなかったから、建築の展覧会という理由だけで突撃したような気がするが、草原に切れ目を入れ、擬態動物のように身をひそめる緑の模型は絵本の世界のように自由で空想的でどこか懐かしく、けれど大人びたクールさもあって心惹かれた。植物で覆われた建物たちは、打ち棄てられた廃墟のようであり、原始的な棲み家のようにも見え、建築という得体の知れない世界を前に立ちすくんでいた自分の気持ちが、ふわりと軽くなったことを覚えていた。

それから長い月日がたつて、環境問題が（当時の誰もが予想しないほどまでに）みな心の心配事になって、緑化やビオトープを用いたグリーン・アーキテクチャもさらりと実現するようになったが、でもそれはむかし見た



「共同生活者のための葡萄園」1976年

ここではないどこか

マッシモ・スコラーリ

Massimo Scolari 1943-

学生のころ、はじめてアルバイトに行った設計事務所の打ち合わせ室に大きなピラミッドの版画が掛けられていた。見たこともないくらい緻密で美しい版画だったけれど、忙しいスタッフの人たちは気に留める様子もなく、所長もそれについて何か話すこともなく、ただそこにあっただ。そのあと事務所の大掃除があつて長年あつたその絵が運悪く仕舞われ、かわりに大きな模型の段ボール箱が置かれたとき、思いのほかさみしくて、自分も将来事務所を開くことができたらお気に入りの絵を一枚飾ろうと思つた。いま、自分の事務所に一枚だけ建築の絵を飾るとしたら、マッシモ・スコラーリの水彩画がいい。

飾りたい絵と好きな絵というのは似ているけれどすこし違う。好きというのはおもしろいとかめずらしいとか興味深いとかも含まれているけれど、飾るとなるともつと慎重になる。絵を飾るといふのは、同時にその絵が自



「シークレット・タウン」1978年

押し通すことも

フンデルトヴァッサー

Handtweiser 1928-2000

たとえば美容院でこちらが建築の仕事をしていることが分かったとき、若い美容師さんが「あ、そうそう、あれいいですよねえ」と話題にする建築家は、かなりの確率でフンデルトヴァッサーだ。あるいはアンテナの利いたデザイナーなんかが集まるカフェをはじめたいとき、棚に置いておくべき建築作品集はフンデルトヴァッサーだ。

オーストリア生まれのヴァッサーは、二〇〇〇年に他界するまでのあいだ、世界中にうねうねと幻想的な建物を設計し、世代を超えてファンも多い。業界以外でより受けがいいのは、よく引き合いに出されるガウディと同じだが、建物が緑や樹木に覆われていたり、社会・環境的な声明やパフォーマンスを行ったこと、オーストリアという建築的にはやや、辺境で活躍したことなどが、鼻の利く愛好家に好まれる理由かもしれない。

正確にいうと彼は芸術家もしくは思想家であって建築家ではない（本名



「摩天楼と村の教会」一九五一年 Handtweiser 135 SKENSCAPAR AND VILLAGE CHURCH, 1951 © Handtweiser Archive, Vienna

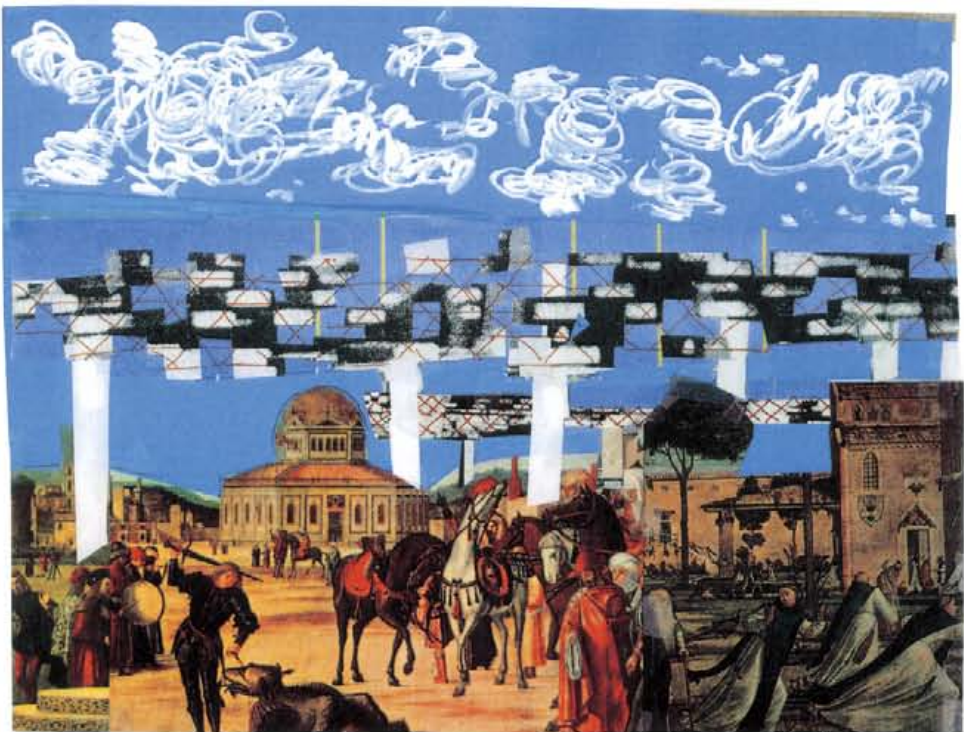
等身大の都市計画

ヨナ・フリードマン

Yona Friedman 1923-

晩年のヨナ・フリードマンの写真を見るとどの写真も愛らしくて、愛犬バルキスを従えてにこやかにたたずむ様子や、孫娘ジュリエットと茶目つ氣たつぷりにカメラを見つめる姿を見ると、あの「空中都市」を描き続けた張本人とはとうてい思えない（『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のドクそっくり！）。けれども国連難民キャンプにまつわるさまざまな社会活動や、夫人とともに制作したアフリカ民話を題材にしたアニメーションを見ると、型にはまらない特別な建築家であることだけはすぐに分かる。

世界中の街の上空に、こどものなぐり書きのようなタッチで巨大な架構をコラーージュした一連のドローイングは、一九五〇年代後半に発表されるや瞬くまに世界中に広まった。シチュアシオニストやアーキグラムといった前衛アバンギャルドに多大なインスピレーションを与えただけでなく、プレファブ材を用いたフレキシブルに自己増殖するシステムは職人ジャン・ブルーヴェの



「ベルリン」2004年

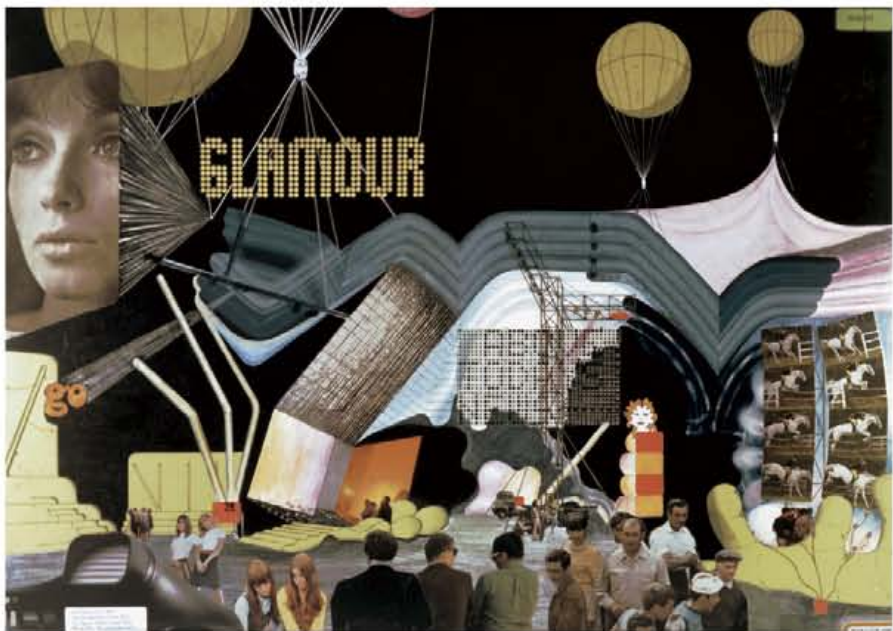
本気の冗談

ピーター・クック

Peter Cook 1936-

アーキグラムに憧れて、その中心メンバーだったピーター・クックが校長を務めるロンドンのバートレット校に留学したのは、二、三歳のとき。オープンングレクチャーでは、部屋が真っ暗になったかと思うと、シユトラウスのBGMとともにピラミッドからバルテノン神殿、ゴシック建築からコルビュジエまでが次々にスライドに映し出され、ああ、きれいなあ、と思っていたら「Fauk」^二というシャウトとともにスポットライトがぱつとつき、壇上にピーター校長が奇術師のような格好で登場した。とんでもないところに来たもんだ、と思った。

いつも悪ノリしすぎるロン・ヘロン、車のエンジンに異様に詳しいデニス・クロンプトン、学者のようにまじめな顔で強烈なジョークを飛ばすデヴィッド・グリーン、ブラムスをこよなく愛するマイク・ウエップとアメリカのポップアートが大好きなウォーレン・チョーク。五人の愛すべき



『野原のインスタント・シティ』1968年

Instant City, Typical Night Time Scene, Peter Cook © Archigram 1968 Image supplied by the Archigram Archiver 2010